

芸術文化と「食」のマッチング

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社 特別顧問

須藤秀一郎さん

Shuichiro Sudo



静岡市にゆかりがあり、東京を拠点に内外で活躍する皆様に、東京から見た静岡市の良さと可能性、まちづくりの方向について、ご提案いただきます。

2回の合併を成就

「温和で懐が深い」というのが社内評だ。人柄を象徴するように、営業や企画部門当時の部下が年に何度か須藤さんを囲み懇親会を開いている。同和火災海上、ニッセイ同和損保のそれぞれ社長を経験、会長時代も含め、計2回の合併を成功に導いた。「いずれもトップの最大の仕事だった。その時の苦労は忘れられない」。

あいおいニッセイ同和損保は2010年



経歴

静岡市清水区生まれ。慶應義塾大学法学部卒。1964年、同和火災海上保険入社、東京営業第一部長、企業営業第一部長、取締役中部本部長、常務取締役などを経て98年、代表取締役社長に就任、2001年、ニッセイ同和損害保険代表取締役社長、06年、代表取締役会長、10年、あいおいニッセイ同和損害保険代表取締役、11年から特別顧問。71歳。2012年、旭日中綬章受章。

10月、ニッセイ同和損保とあいおい損保が合併して発足した。国内最大、世界でも上位のMS&ADインシュアランスグループの中核だ。同社は地域貢献にも力を入れており、全国に「地域AD倶楽部」(例・静岡AD倶楽部)を設け、地元商工会議所等と連携してセミナーやビジネス情報などを提供している。

活用し切れていない財産

須藤さんは、静岡市の「芸術文化や関連

施設の素晴らしさ」を指摘する。まず挙げたのが静岡芸術劇場、日本平北麓の舞台芸術公園、県立美術館のロタン館。特にロタン館に常設展示されているロダンの作品数は国内最多を誇り、「皆さん感激して帰っていく」。また、三保「羽衣の松」の前で毎年秋に演じられる新能も「大変評判がいい」。さつた峠に行けば広重の浮世絵の景色を実際の目で見て、当時を思い浮かべることができる。

「しかし、こんな素晴らしい財産があるのに生かし切れていない。もっともっと観光のウリとして活用できるのではないか」。「お酒や地魚など食べ物もうまい。グルメ好きにはたまらないはずだ。芸術文化と食べ物がマッチングした形で売りだしたらいいのでは」と提案する。

知る人ぞ知る清水区の鉄舟寺。毎年、源義経が使ったとされる「薄墨の笛」を聴く会を開く。「義経の笛はブランドの一つとして使える」。

「鎌倉では、『鎌倉芸術祭』で歴史と伝統の鎌倉を生かしている」。京都の寺院は秋の観光シーズンに普段非公開の庭園などの文化財を特別公開する。「静岡市でも、例えば春に一斉特別公開するとか、検討してみたらどうか。真似ではなく、よいところは取り入れつつ独自色を出し、盛り上げていくことが大切だ」。

郷土の発展を願う強い気持ちがひしひしと伝わってきた。

(文・写真：長田義明)